

登山時報



SPRING
No.583

特集 第36回総会

能登半島地震ボランティア活動／足尾WCM





震災ボランティアにおける 山岳団体の役割

倒壊したブロック壁の撤去と搬出作業

石川県勤労者山岳連盟 理事 北市 正

能登半島地震は、その名の通り“半島”地震だった。京都が都だった頃は北の果てだった北陸地方の北部に突き出す、日本列島最大の半島末端を震源とした大地震。地理的特徴は救助・救援を困難にし、ボランティア活動へ行くこと自体が障害となった。

震災後、当時理事長をしていた私のもとには、県連でのボランティア活動の募集に関する問い合わせが多数あったし、私自身も活動を模索していた。県内で発生したアクセスの悪い被災地で、地元山岳団体の特色を活かした活動ができないか。山岳団体の特色は①パーティ行動が可能であること、②ザックに荷を積んだ人力運搬が可能であること、③クライミングの基礎技術があり高所作業可能であることだと考えた。

災害ボランティア団体との コラボで軌道に

石川県の担当者へ相談しても手が回らない状

態だったが、登山道整備の知り合いがRATs NESTという災害ボランティア団体と関わっており、相談に乗ってくれた。団体主催者と活動について打ち合わせし、山岳団体としてのボランティア活動が始まった。



志賀町ボランティアセンター訪問

県連内でボランティアを募り、10名程度で志賀町ボランティアセンターを訪れ、RATs からニーズ表を受け取り、段取り。ニーズ表には要望者と要望内容が記載され、地理情報QRコードをたよりに現地へ向かう。要望内容は、主に損傷したブロック壁の撤去と搬出、瓦の搬



建機クレーンを使った撤去作業

出。

手作業のみで作業できる現場は我々で完結。建機や破碎機が必要なレベルの作業は技術ボランティアと臨機に合流する。

作業現場に着いた県連チームは、作業内容を確認し、ミーティングで各自の役割分担や安全上の注意点を打ち合わせる。大ハンマー担当は損傷したブロックを破碎、運搬担当が一輪車で搬出、積み込み担当が3tダンプへ積み込む。搬出が完了したら震災ゴミ集積場へ持ち込み、その間に残りのメンバーは次の現場に向かう。多い時は1日で5現場を完了させ、日常的に山岳地帯でのパーティ行動を実施している、山岳団体のチームワークを存分に発揮した。

今回の地震では瓦文化の根強い地域柄、屋根の損傷が多かった。屋根の応急処置、修復は雨漏りに直結する、住めるか住めないかの要素だ。ただ高所作業となるため、一般ボランティアでは作業できない。ここでも、山岳団体の特色を發揮した。日常的にハーネスを装着し、ペアになってロープを結んだクライミングを行っているため、屋根上で頂点の棟瓦を支点にした両面での作業に、即座に対応した。

クライミングをいかに発揮した屋根上の作業



屋根の雨漏り応急処置作業

現在活動している志賀町は、能登半島西側の比較的アクセスの良い地域だが、それでも手付かずの損傷した家屋、ブロック、道路が多数見受けられる。素人目にも、復旧には相当の時間を要する現実が伝わってくる。微力ではあるが、今後も山岳団体の特色を活かしたボランティア活動を継続していきたい。

義援金の御礼

能登半島地震では多くの方が被災しました。石川県勤労者山岳連盟の会員には能登在住の方が少なかった事もあり、直接に生命にかかる被害はありませんでした。しかし、家屋の損壊などの被害があった会員が10名いて、震災から3ヶ月経った今なお不便な生活を強いられている会員もおります。

全国の労山の皆様の動きは速く、私たち石川県連が右往左往しているうちから、多くの義援金が全国連盟に寄せられ、ボランティア活動に駆けつけてくれた方もおられました。全国の労山の仲間たちの活動・活躍には、本当に感謝しかありません。

皆様からお寄せいただいた大切な義援金は、石川県連の理事会で諮り、被災した会員へのお見舞金として、これからも続く復興支援のボランティア活動の一部として、そして、石川県や日本赤十字社などを通じた寄付として、全て有意義に使わせていただく事をお約束いたします。

石川県勤労者山岳連盟 副会長 浅瀬和人

登山者だからできる 能登災害ボランティア

星と焚火『能登支援チーム』 木下育美（山岳冒険倶楽部 星と焚火／福岡県）

私たちのチームで初めて救援ボランティアに行くべきか話し合ったのは、1月2日のことだった。この日からいつでも出発できるように支援のための準備を始めた。

しかし、石川県知事より早々に個人的なボランティアの自粛を呼びかける報道があり、忸怩たる思いで2月まで様子を見た。

2月になっても水さえも供給できていない地区が多くあり、残念ながら地震発生直後の災害状況とフェーズはあまり変わることはなかった。今となっては、早く現地で活動していれば、より早く不自由な生活をしている皆さんの力になれたのにと後悔しかない。

石川県による県外ボランティアの受け入れについての指針は、あくまで一般ボランティアの受け入れ態勢が整っていないという理由からの発表だ。しかし、能登の最奥部の集落からは「早くボランティアの方に手伝ってほしい」と悲痛な生の声が聞こえてきた。行政も、スキルの高いプロボランティアについては暗黙の了解で、公式にはストップをかけている状況ではなかった。

チームは、学習塾を経営する僕と会社を営む相棒の2人。東日本大震災の時も登山者としていち早く現場に出向き、現場のニーズにあった活動を自己完結型で行ってきた。アルパインクライミングで培ったレスキュー技術。雪穴を掘って一夜を過ごすことができる経験と体力。自己完結型の支援活動はお手のものだ。奥

能登の2月段階のフェーズでは、まさに私たちのチームのような力が求められていた。

能登へは相棒と2人、アーム付き3トントラックで向かった。トラックには水とお湯の供給システムを作るための500ℓタンク2つ、湯沸かし用の浴槽、灯油ボイラー、揚水ポンプ3台、配管材料。解体及び倒木処理のためのチェーンソー、エンジンウインチ、発電機、土木高所



出発準備中



歩道をふさぐ倒木をチェーンソーでカットしグラブ車に乗せる

作業ギア各種。高齢者介護施設で2か月近くお風呂に入れていない入所者さんの、汚れてしまった布団を新調するための布団20セットなどを満載し、七尾市に向かった。2月15日の夕方16時に福岡を出発し、着いたのは翌朝10時。ほぼ休憩なしで18時間近くかかった。

到着してすぐさま水とお湯の供給システムを作りはじめ、夕方にはほぼ完成した。前日朝から不眠で30時間以上。初日の活動がやっと終わった。この夜は高齢者施設の支援物資置き場に寝床を借りた。

翌日お昼には、お風呂にお湯を供給することができた。約50日ぶりに入るお風呂。おじいちゃんおばあちゃんの笑顔がすべての苦労を吹っ飛ばしてくれた。健常者は早い段階から近くの温泉に入ったり、自衛隊の仮設温泉にも行くことができた。しかし、介護が必要な方にはそんなことはできなかった。自力でトイレにも行けない高齢の方々にとって、お風呂に入れず50日間がどんなに過酷なものだったか、想像にたえない。

お湯の供給システムの後には、施設のキッチン・洗濯機・トイレへ水を供給するシステムの構築に入った。お湯も水も、僕らは専門の職人ではないし、そんなに材料もそろわないので、ホームセンターで手に入るもので代用した。

30名ほどが入所するこの施設では、トイレの洗浄を1回行うのに10ℓの水が必要で、それを1日10～30回ほど行う。洗濯機一つで80ℓ、それが6台フル回転するから、1日2000ℓ近くになる。施設の職員さんは僕らが来るまで、20ℓのポリタンで行っていたのだ。1日だけでポリタンが約100本必要で、これを給水車からもらって運ばなければならなかった。僕らの手助けがどれだけ役に立ったか。改めていい仕事ができたと自負してしまう。

50日ぶりにお風呂に入ったおじいちゃん



給水と給湯のシステムと雨仕舞の小屋



キッチンへは散水ホースでシステムを作った



洗濯機への給水
この作業をポリタンで行っていた

3日目からは、近隣の道路の整備に回った。車道は応急処置が済んでいたが、歩道の整備は行き届いてなかった。倒木をチェーンソーでカットし、アーム付きトラックで処理場に運ぶ。こんな作業をしながらあつという間に1週間の活動期間が終わった。

できる人が、できる事を、できる時に、できる所で。祈る事でも寄り添う気持ちだけでも大切なことだ。

僕ら登山者にはより多くのことができる。皆さん躊躇しないで、ぜひ手助けに行ってください。